

（様式6-A） A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

村田 智行 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Significant Residual Ischemia on Myocardial Perfusion Imaging after Optimal Medical Therapy with or without Coronary Revascularization Predicts a Worse Prognosis

（至適薬物療法や冠再灌流療法後の心筋シンチグラフィにおける残存虚血の予後増悪の予測）

Annals of Nuclear Cardiology (in press)

Tomoyuki Murata, Takuji Toyama, Shu Kasama, Hiroshi Hoshizaki,
Shigeru Oshima, Masahiko Kurabayashi

論文の要旨及び判定理由

冠動脈疾患患者に広く行われている検査として心筋シンチグラフィがあり、心筋虚血や生存心筋の精査に用いられる。本研究では、薬物療法や冠再灌流療法後の心筋シンチグラフィでの虚血の残存が、冠動脈疾患患者の予後不良に関連するかを調査している。

心筋シンチグラフィにて虚血所見を認めた冠動脈疾患患者で、薬物療法や冠再灌流療法を施行後、1年以内に再度心筋シンチグラフィを施行した、188人の患者を対象として後ろ向きに調査が行われた。心筋シンチグラフィの負荷時と安静時の集積低下スコアの差がsummed difference score (SDS)であり、治療前のSDSに対する治療後のSDSの百分率（ $\text{post SDS} \times 100 / \text{pre SDS}$ ）が残存虚血率と定義された。心臓死、非致死性心筋梗塞、心不全入院、PCIやCABGによる冠再灌流療法、脳卒中、非心臓死が有害事象として調査された。対象患者の内の54人(28.7%)が有害事象を生じ、単変量解析では、残存虚血率が高値であること、治療前の負荷時の集積低下スコアであるsummed stress score (SSS)やSDSが高値であることに、有害事象の発生との有意な関連を認め、また糖尿病があること、治療後のSDSが高値であること、左室駆出率が低いことも、有害事象の発生と関連する傾向を認めた。上記項目を用いた多変量解析では、残存虚血率が高値であることのみならず、有害事象の発生との有意な関連を認めた(ハザード比1.025、 $p=0.018$)。

本研究では、薬物療法や冠再灌流療法を受けた冠動脈疾患患者において、心筋シンチグラフィでの残存虚血率が有意である患者は軽度である患者に比し、有害事象の発生が多いことが明らかとなった。治療後に重度の心筋虚血が残存することが、冠動脈疾患患者の不良な予後を予測しうることを示唆され、冠動脈疾患の臨床に寄与するものと認められ、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

（審査年月日）平成 31年 2月 25日

審査委員

主査 群馬大学教授（医学系研究科）
臨床検査医学分野担任 村上 正巳 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）
腎臓・リウマチ内科学分野担任 廣村 桂樹 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）
脳神経内科学分野担任 池田 佳生 印

参考論文

該当論文なし

（様式6, 2頁目）

最終試験の結果の要旨

心筋シンチグラフィの残存虚血率の予後予測における有用性 および 虚血評価における心筋シンチグラフィの有効性と問題点について

試問し満足すべき解答を得た。

（試験年月日）平成 31年 2月 25日

試験委員

群馬大学教授（医学系研究科） 循環器内科学分野担任	倉林 正彦	印
群馬大学教授（医学系研究科） 臨床検査医学分野担任	村上 正巳	印

試験科目

主専攻分野	循環器内科学	A
副専攻分野	臨床検査医学	A